

## 学位申請論文の審査結果の要旨

本審査委員会(以下、「委員会」と略称)は、京都府立大学学位規程 12 条に基づいて以下のとおり審査の内容を研究科会議に報告する。

### [評価]

現在、大人による幼児に対する絵本の読み聞かせは、家庭や幼稚園、保育園などの施設で幅広く実施されている。その目的としては、親子で触れ合うことや、園の先生・保育士と心を通わせること、想像する楽しさを味わうことなど、情緒面での効果が強調されることが多かった。一方で、絵本の読み聞かせのもつ認知面の効果に関しては、言葉の習得を助けるという言語能力関連の期待が大きく、学術研究もそうした効果を検証するものが中心であった。これらの研究では、確かに絵本の読み聞かせが語彙力や読解力、言語運用能力などを向上させる可能性が示されてきたが、より広範な心的過程に関わる他の認知機能への効果はほとんど検討されてこなかった。また、子どもが5歳くらいになると家庭で読み聞かせが行われる頻度が低下することが知られており、幼稚園や保育園での集団読み聞かせのもつ役割や、子どもが独力で絵本を読む萌芽的読書(一人読み)の有効性も、実証的に検討されるべき重要な課題である。

このような研究動向を踏まえて、本論文は、語彙力だけでなく、様々な認知活動において情報の処理と保持を支えるワーキングメモリを取り上げ、幼児期の絵本の読み聞かせと一人読みがもつ効果について、調査と実験をもとに実証的に検討を行ったものである。特に以下の諸点について、学術的・応用的な見地から優れた研究であると評価することができる。

1. 本研究は、まず調査によって家庭での読み聞かせと認知能力との関連を明らかにした後、2つの介入実験により方法面での改良を加えながら集団読み聞かせのもつ認知能力への影響を調べ、最後に読み聞かせを補う家庭での一人読みの方法の有効性を検証している。大きな研究テーマに含まれる個別の課題を解明して行く流れにおいて各研究が有機的につながっており、ひとつのまとまりのある研究として完成されている。

2. 日本で十分に行われていない読み聞かせの認知面における効果に関する実証研究であるだけでなく、現在国内外での議論が続いているワーキングメモリトレーニングの有効性に関する実証研究の側面も備えていることから、複数の研究テーマにまたがる高い学術的価値が認められる。

3. 日本では保育・教育現場における長期的な介入研究が少ない中で、本論文はこれを複数行っている。そうした研究の実施に必要な現場との交渉、調整や信頼関係の構築の点、あるいは研究に要する時間や労力といったコストの点から考えても、非常に困難な課題に挑戦し達成している、貴重な実証研究であると見なし得る。

4. 研究の成果が具体的であり、とくに絵本の反復や付箋の使用といった読み聞かせの工夫は家庭や施設における実践で取り入れることが可能で、応用的な意義が大きいと考えられる。小学校以降での学力格差・低下が今日的な課題となっているが、語彙力やワーキン

グメモリの向上という観点から家庭と施設での読み聞かせの効果を検討した本研究は、これらの課題に取り組むうえでの貴重な学術的根拠を提供するものである。

以上の成果とともに、本論文は次のような課題を持つものである。

1. 第5章、第6章を介入研究として厳密に見た場合、剰余変数に対する統制と、効果の持続性の確認が十分ではない。例えば群間で施設や読み手そのものが違っているサンプルが含まれている点を統制したり、主要な剰余変数と考えられる各家庭の社会経済的地位、文化環境などについて事前に統制したり事後的に分析したりすることが望ましかった。また、ある程度時間をおいてから追跡調査を実施し、介入の効果の持続期間が確認されていれば、研究の価値がより高まったと考えられる。

2. 研究全体で、対象を就学前の幼児という大きな括りで扱っており、年齢や発達段階の細かい区分と対応づけた考察が不足している。参加児が何歳でどういった発達段階にあるかは心的過程や行動における様々な質的差異につながり得る要素である。こうした要素に関する知見をもとに、本研究の読み聞かせや一人読みの方法がどういった段階にある子どもに適したものであったか、より詳細に検討がなされるべきであった。

3. 本研究は読み聞かせや一人読みによって語彙力やワーキングメモリに向上が見られることを実証しているが、その機序を十分に検討しているとはいえない。心的能力は使えば向上するという単純なものではなく、トレーニング研究ではそこに関わるどの心的過程を、どのように刺激するかが大きな問題とされる。本研究では読み聞かせの効果の機序に関する考察が十分だとはいえず、語彙力やワーキングメモリ、あるいは脳に関する理論に基づき、この点について具体的に論じられるべきであった。

#### [公開審査の状況] (敬称略)

6月9日に博士論文と発表要旨(添付)が書面で公開され、6月14日まで閲覧者からの質問を受け付けた。これらの質問に対する回答は、6月16日に書面で公開された。

森下委員からは絵本の読み手の違いや実験結果の解釈等について、服部委員からは幼児の発達や保護者の関わり方等について、村田委員からは幼稚園・保育園での絵本の読み聞かせの現状と今回の取り組みの意義等についてそれぞれ質問があった。また、審査委員以外の質問者として、石田正浩(本学公共政策学部准教授)から絵本の材料と事件結果の解釈についての質問があった。いずれの質問に対しても、自身の研究成果と先行研究の知見をもとに、適切な回答がなされた。

#### [審査結果の報告]

委員会は、以上の審査委員による論文審査と公開審査を通じて、申請者の強い課題意識、一貫した論旨と研究の蓄積を確認するとともに、論文は公共政策学研究科「博士論文の審査基準」(2017年1月5日)における「博士学位論文の評価の基準」に照らしてその基準を達成していると判定した。したがって、委員会は申請者が博士(福祉社会学)の学位に値するものと判断する。